

椿 思いつくまま
～ ピタルディ・ユンナニカ ～

小泉不二男

8月も最終日の31日に静岡県浜松フラワーパークを見学した。

きっかけは、7月に座間市の旧横山三郎邸椿園を見た折、たまたま一緒になった浜松フラワーパーク職員の田中克明さんとその後メールのやり取りをする中で、雲南のトウツバキの原種が露地で育っていることを知ったことによる。

詳しく訊くとその他にも原種椿が育っているとのこと。浜松は、無霜地という説があるほど温暖だという。花の時期を待ってからも思ったが、いのくち椿館の原種ツバキ図鑑を眺めているうちに、とにかく見てみたい、という気になった。

当日は、8月末とは思えぬ気温35度。真夏でもめったにない高温に当たった。浜松から舘山寺行きのバスで約40分。11時に園入り口で田中さんの出迎えを受けて、強烈な日差しの中、さっそく園内に。



戸外で育つピタルディ・ユンナニカ

浜松に行ってみると、トウツバキの原種ではなく、ピタルディ・ユンナニカの

(左) 浜松フラワーパーク
大花壇、大温室、日本庭園、バラ園、菖蒲園等の植物公園。
園内は田中さん運転の軽トラックで見学。夏場は無料開放。水場で親子連れが遊ぶ。

明日から9月。秋ぞ待たるる。

(左) 雲南野山茶

Camellia pitardii var. yunnanica

ピタルディ・ユンナニカ

同程度の育成木が3本ある。高さ約3m。かつて岩井園長(当時)が植物園協会の調査で中国にて入手したと伝わる。崖上に植栽し露地で元気に生育。樹勢よし。

浜松まで来て崖から落ちてはならじと椿にしっかりと掴まったところ。田中さんも足元注意で撮影。

名札が下がっている。田中さんは、「トウトツバキの原種と聞いているのですがねえ」とのことです。それ以上は分からなかった。



ヤマトウトツバキ（トウトツバキ原種） いのくち原種椿園（富山県南砺市）
（平成 21 年 3 月 21 日全国椿サミット南砺大会にて小泉撮影）
温室内で育成されている。濃淡のあるぼかしに一重咲き。原種とは思えぬ華麗な花。中国では、切り花として売られているというのも頷ける。

帰宅後、あらためて原種ツバキ図鑑（執筆 桐野秋豊）をみると

「ヤマトウトツバキ（トウトツバキ）雲南紅花油茶（*Camellia reticulata*）とある。解説文には

「日本ツバキ協会が主催の中国ツバキ調査の際に桐野が 1980 年（昭和 55 年）2 月、1985 年（昭和 60 年）2 月、1996 年（平成 8 年）2 月に現地の山にてそれぞれ枝を採集する。雲南省昆明周辺の山地には「ピタルディ・ユンナニカ」と呼ばれる一群が多く自生する。昆明植物研究所のツバキの研究者であった夏麗芳氏によると、これらのピタルディ・ユンナニカは現在すべて「ヤマトウトツバキ」と称することになった、と私たち日本からのツバキ調査団に告げられた。」とある。

「図鑑」の説明では、昆明植物研究所の説にしたがいトウトツバキ（原種）とピタルディ・ユンナニカは同一とされ、当然ピタルディ・ユンナニカは掲載されていない。

ところが、浜松の岩井園長さんがトウトツバキと同一とされ消滅したはずのピタルディ・ユンナニカを中国で入手しているのはどういうことなのだろうか。

ピタルディ・ユンナニカは消えてしまった原種なのか、あるいは昆明植物園の夏麗芳氏の説が中国の統一した見解ではなく諸説あり、ピタルディ・ユンナニカは今も存在するのか気になった。

植物学の素養のない素人ではあるが、手持ちの資料で調べてみた。

まず、手近なところで日本ツバキ協会のバックナンバーからである。

協会誌 19 号（昭和 55 年）に、協会として初めての中国旅行団 14 名（団長萩谷薫会長）が雲南を中心に調査して際の報告書が参加者の一人桐野先生によって書かれている。

ヤマトウツバキは「ワイルド・フォーム・レチキュラータ」の訳語のようで、日本名を「雲南山茶」と表記している。

次にピタルディ・ユンナニカについて、「驚いたことに花色、花形、葉の形は株によって変化しており・・・本種の内容は非常に把握しにくい」と記している。この時点では、両者は別種としているが、これだけでは分からない。

次にツバキ分類学の基本書ともいえるべき「A revision of the genus camellia」(「ツバキ属の改定」著者シーリー(Robert Sealy 英)) にあたってみる。

無論英文である。幸いなことに、日本ツバキ協会創立 50 周年記念出版として訳本が出ているので、語学がだめで植物学の門外漢でも少しは食いつける。

シーリーは、イギリスのキュー王立植物園の植物分類学者オットー・スタッフ (Otto Stapf) 博士のもとで助手を務めていた人物で、博士の死後、それまでの博士との研究を「ツバキ属の改定」として 1958 年王立園芸協会刊にまとめている。これはツバキのバイブルといわれるほどだそうである。

まず、シーリーは、トウツバキ (reticulata) とピタルディ (pitardii) を分けて分類している。



ピタルディ

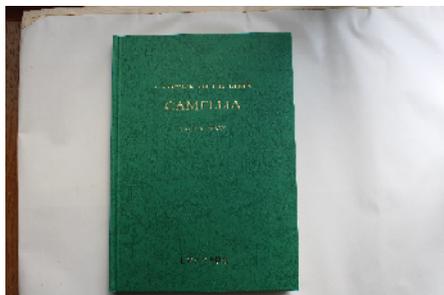
いのくち原種ツバキ図鑑より

ピタルディは中国の原種ツバキの一つで、その名はフランスの植物学者ピタル (C.J.Pitard) の名に由来する。20 世紀はじめに貴州省においてフランスの宣教師が収集したものをピタルがパリの植物標本館に預け、1916 年に命名されたという。

シーリーは、ピタルディに関しスタッフ博士が別種として考えていたもう一つの種があったので、それをピタルディの変種としてピタルディ・ユンナニカとして分類したという。

そこでももとのピタルディとピタルディ・ユンナニカを区別する必要が出

たため、あらためてピタルディはピタルディ・ピタルディと名付けられた。したがってピタルディは2種に分かれることとなり、両種とも分類者の Sealy の名が入って表記されている。これがピタルディ・ユンナニカの分類上の経緯である。ちなみにユンナニカとは雲南のことである。



「 A revision of the genus camellia」(「ツバキ属の改定」著者シーリー(Robert Sealy 英))
1958 年英国王立園芸協会刊訳本
(日本ツバキ協会刊) (翻訳者松本重雄元協会理事 監修者箱田直紀(現日本ツバキ協会会長))

一方のトウツバキは、古くから知られ、中国のツバキといえはこちらを指してきた傾向がある。日本では戦後に広まり、豊満華麗な花容に今も愛好者は多い。

シーリーによれば、トウツバキは 1820 年にロー船長 (キャプテンロー) により英国に持ち込まれた八重か半八重のツバキで、その後 100 年あまり中国南部の庭園や種苗園から英国に持ち込まれた園芸種のみが知られていたという。

したがって、トウツバキ (reticulate) (1827)として発表されたものは、園芸的に改良されたもので、中国の山野にある原種は知られていなかった。この状態が 100 年以上続いたようだ。

新たな発見があったのは 20 世紀に入ってからである。1934 年にスタッフ博士がプラントハンターのジョージ・フォレストによって中国から送られて来た標本がトウツバキの野生種であることを確認したことによる。中国南部の山地でトウツバキの野生種が自然に生育していることが知られたのである。

シーリーは、この一重のトウツバキをそれまでの園芸的なトウツバキと区別して reticulate forma simplex (一重と云う意味か: 以下 simplex) と表記すべきといっている。これがヤマトウツバキということになるのだろうか。

シーリーは、トウツバキの原種 (simplex) (ヤマトウツバキ) とピタルディ・ユンナニカは別種扱いである。そうすると浜松のピタルディ・ユンナニカはシーリーの説と轍を一にし、名札を付けているように見える。

別の資料に当たってみる。

中国の中山大学の張宏達教授の山茶属植物的系統研究 (A TAXONOMY OF THE GENUS CAMELLIA (ツバキ属の分類法の意味か) (1981年中山大学刊) である。ツバキ協会事務室の書棚にあったもので、箱田先生に著者(くずし字で達筆、推測)が恵贈した旨のサイン(1984年2月22日付け)がある。

訳本がないので殆ど内容不明だが、分類番号15がトウツバキ、16番ピタルディ、16番aピタルディ・ユンナニカ、16番bピタルディ・アルバ(alba)と記載されている。アルバは初出だが、張教授の分類・命名である。

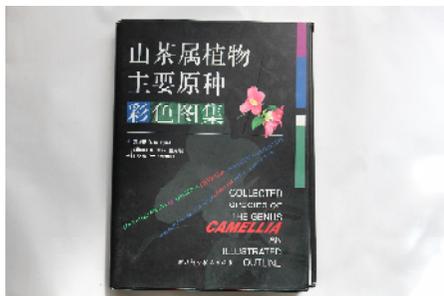
ここにもピタルディ・ユンナニカの名がある。こちらもしーリー分類を踏襲しているといえる。

さらに中国側の出版物だと 山茶属植物主要原種彩色図集(2005年浙江科学技术出版社)がある。著者は、高継銀氏その他である。所属は中国林業科学研究院亜熱帯林業研究所研究員(英文は professor(教授?)と表記)とあり、40年間ツバキ研究に従事し油茶で業績をあげたと記されている。(漢字(簡体字)と英文併記。)

その分類によると

(1) ピタルディ (西南紅山茶)

自生地として、四川、湖南、広西、雲南をあげ、海拔800から1,800。この4省は中国では西南部と呼ばれる地域である。花色は、白からローズピンク。高地に自生することから耐寒性があるものと思われる。



山茶属植物主要原種彩色図集



ピタルディ (左 同書より)
白花に薄紅。いのくちと花色異なる

(2) ピタルディ・ユンナニカ (○叶西南紅山茶※○は(搾のてへん無し)

しーリー、張教授と同じ分類。浜松のツバキはこれである。トウツバキとは別種扱い。

この品種は、中国語で雲南野山茶(云は雲の略字)と表記。浜松の品種

名札と一致する。分布の範囲は広く、ピタルディ・ピタルディの範囲と重複している。花色は西南紅山茶に同じく白からローズピンク。

ちなみにこの山茶属植物主要原種彩色図集の巻頭には張教授が賛辞を寄せている。巻頭に載せることで師事の礼を示したものであろうか。

(3) ピタルディ・アルバ (西南白山茶)

張教授の分類による原種。白色の花。四川省に直径40cm、高7mの木が沢山あるという。それらが掘り出されているので保護が必要という。

同頁に四川省の大木の写真が掲載され、木の根元に名古屋の杉原信司さんが写っている。氏名の記載はない。名古屋椿協会の旧知の間柄でもあり、電話で確認すると原種調査に行った際のものだとのこと。著者の高継銀氏もよく知っているという。ちなみに杉原氏は名古屋椿協会誌上に中国南部のツバキ調査に基づく考察をいくつも発表されている。

(4) トウツバキ (○山茶 ※○は(さんずい真))

日本ツバキ、サザンカとともに、*Camellia* 属の3つの最も広く栽培されている種の1つであるとする。掲載の写真は半八重・八重の華やかなツバキで、日本でトウツバキと呼ぶものである。何世紀にもわたり、ユンナニカや他の関連する分類群と交雑し、園芸種を幅広く作り出し古い品種も寺院等にあるとのこと。シーリーのいう野生種で一重の原種 (**simplex**) ではなく、園芸品種のトウツバキを紹介している。この点シーリーと異なる。

最後に、ツバキ協会理事会で箱田会長と同席した際、トウツバキの原種とピタルディ・ユンナニカの異同について、今の様子を訊いてみた。

それによると、中国の原種ツバキ分類関係を発表順に年代を追うと、1958年シーリー、1981年張宏達、2005年高継銀、2001年関天禄がある。この関氏が、昆明植物研究所の所属で、ピタルディ・ユンナニカをトウツバキの原種と同一と発表したのである。いのくちの図鑑で「ピタルディ・ユンナニカは現在すべて「ヤマトウツバキ」と称することになった」と桐野先生に伝えた夏麗芳氏は同研究の関氏の上司ないし先輩とのことであった。

現在、国際ツバキ協会会長は中国人であるが、特にこのことに触れることもないことから、関氏の説が中国で定着したとも思われぬ、とのことであった。したがって、現在は、シーリー以降云われてきたピタルディ・ユンナニカも含めて複数の学説が存立していると考えられるという。とすれば、浜松の園長さんが雲南でピタルディ・ユンナニカを入手したのも自然なことであろう。

箱田先生は続けて、協会は中国ツバキ調査に何度か赴いたが、それは雲南省、

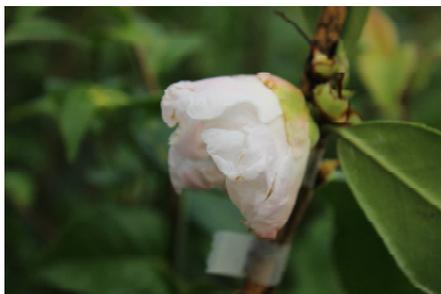
貴州省であった。特に雲南省では一重のトウツバキ（原種）やピタルディ・ユンナニカに似た花色の異なるものを多く見たという。これが変種として発表されたりしたようだが、単なる個体差として整理していこうとする動きもあるようだ。

またピタルディ・アルバを白花のピタルディとして個体差とみなす考えやピタルディは白花が基本で、こちらを原種とする説もあるらしい。

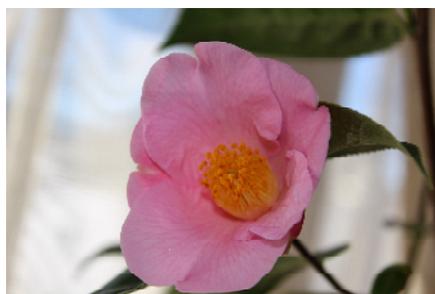
杉原さんは、協会とは別ルートで、雲南・貴州以外の湖南省や湖北省において随分調査されているので、中国ツバキについて別の説を持っておられるようだと言えられた。

そういえば、愛知県知立の前田悟名古屋椿協会長のナーセリーで湖南山茶を見たことがある。杉原さんが中国から持ち帰ったという。協会で行っていない湖南省のツバキであろう。いのくちの図鑑にも採録されていないようだ。まだまだ知られていないことが多いような気がする。

今回、ピタルディ・ユンナニカへの疑問から調べてみることになったが、資料や情報も少なく、分からないことが多いと感じた。それゆえ、いのくち原種ツバキ図鑑の貴重さをあらためて感じた。さらにはその後の知見等を加えて、これを継ぐものが欲しいところである。



湖南山茶（白花）薄く紅が入る
前田ナーセリー（愛知県）にて



湖南山茶（ピンク）
茨城で、露地植えで育てている。